2016
KANAGAWA

日本も元気にする

青年海外協力隊

世界を元気にした人は、日本も元気にできる！

「どんな人」が「どんな出会い」を経て「どんな仕事」をしてきたのでしょうか？
JICAボランティア経験者へのインタビューを紹介します。

JICA ジャイカ

青年海外協力隊は、いま、神奈川のチカラとなっています!

神奈川県から青年海外協力隊・日系社会青年ボランティアに参加した人は2,900人を超えました。彼らは、2年間にわたる開発途上国での活動を通じて、異なる文化や生活、価値観に触れながら、広い視野と想像力を育て、コミュニケーション力や課題解決力など磨いてきました。
そして、いま、日本を、神奈川を元気にするために、さまざまな場所でその力を発揮しています。
そんな彼らの帰国後の姿を、ここに紹介します。
世界とともに歩む日本の未来のために、あなたの一歩を世界は待っています!

Interview

No.01
川崎市宮前区
株式会社 イースクエア 社員
内田 謙一さん……P.3

No.02
横浜市港南区 日系社会青年ボランティア
横浜市立上永谷中学校 教諭
江本 敦子さん……P.5

No.03
相模原市中央区
株式会社 つるや呉服店 代表取締役
萩生田 康治さん……P.7

No.04
藤沢市 現職教員特別参加
藤沢市立秋葉台小学校 教諭
佐藤 直子さん……P.9

No.05
横浜市青葉区 日系社会青年ボランティア
日本体育大学 職員
黒木 豪さん……P.11

No.06
横浜市旭区 現職参加
よこはま動物園ズーラシア 職員
川口 芳矢さん……P.13

No.07
横浜市南区
ヨーロッパ・ソーラー・イノベーション 株式会社 社員
森田 麻由さん……P.15

No.08
横浜市緑区
横浜市緑区役所 職員
安養寺 智さん……P.17

Republic of Yemen
赴任先 イエメン

《計画・国際協力省 IT部門》
・任地：サナア市
・標高約2,300mの高原地帯、旧市街地は世界遺産
・同国におけるIT関連を一手に引き受けている機関への配属

E-SQUARE

途上国ビジネスに携わり よりよい社会をめざして

内田 謙一（うちだ けんいち）さん

(株)イースクエア
コンサルティンググループ マネジャー

神奈川県出身。システムエンジニアを経て、2007年協力隊員としてイエメンに赴任。計画・国際協力省のIT部門でIT技術の指導などに携わる。帰国後、ロンドン大学教育研究所で学び、2013年にろ過材メーカー日本原料(株)に入社し途上国におけるビジネスモデルの形成に従事する。現在は、(株)イースクエアで戦略的CSRコンサルティング業務に携わりながら企業の海外展開支援を担当。

《派遣中》
①ITワークショップの講師として活躍
②イエメンの計画・国際協力省副大臣への訪問
《帰国後》
③精力的に次々と仕事をこなす

退職しても参加する価値があると決断

スラリと伸びた長身が印象的な内田さん。現在の会社で担当する途上国ビジネスに話が及ぶと、全身から仕事への情熱がほとばしる。協力隊参加前は、システムエンジニア(SE)として多忙な日々を送っていた。しかし、担当のプロジェクトがインドに移管することになり、今後SEの仕事は低賃金労働が可能な海外への外注が増えると危機感を覚える。「SEのプロジェクトマネージャーとしてのキャリア形成のため、国際感覚を磨く必要があると思った時、協力隊を知ることに。現職参加を希望しましたが当時の人事制度では叶わず、でも海外経験を積むなら今しかない、退職しても行きたいと参加を決心しました」。

国際協力から途上国ビジネスへ昇華する思い

イエメンへの赴任が決まり、内田さんはコンピューター技師として計画・国際協力省のIT部門でIT技術の指導などに携わる。「停電のたびにPCが使えず、新しいシステムをつくっても活用される機会が少ないなど、技術力はあるのにSEが活躍できる環境ではなく、賃金を含め雇用条件のいい周辺国に人材が流れていく状況でした」と当時を振り返る。さらに、PCの修理や一般ユーザーからの問い合わせにSEが応じることも。本来の業務に注力できない状況に問題を感じ、ITスキルを磨く一般ユーザー向けのワークショップも行ったという。

「イエメンで実感したのは、雇用創出の必要性です。帰国する頃には国際協力ではなく、ビジネスとして国際開発に携わりたいと思うようになりました」。帰国後、国際開発コンサルタント企業への就職をめざすものの、即戦力につながる実務経験が足りず全敗。同時期に紹介されたJICAのボランティア調整員に採用され、10ヵ月間シリアで業務に従事する。情操教育にかかわる隊員を支援する中、低い就学率の根底には貧困問題があると感じ、教育・国際開発の視点を学術的に学ぶため英国に留学を決めた。その中で、途上国市場に展開している民間企業で国際開発に携わりたいという思いを確かにし、大学院修了後、ろ過材メーカーの海外営業として途上国に赴き安全な水の供給とビジネスモデルの創出に努めた。

協力隊を経て見えてきた社会での役割

イエメンで目の当たりにした社会の課題が、内田さんを途上国ビジネスへと導き、現在は帰国隊員向けの就職情報提供ウェブサイトを通じて出会った(株)イースクエアで、日本の中小企業と共に途上国でのビジネス形成に関わっている。「SE時代は、働く意味など考える暇もないくらい仕事に追われていました。協力隊を経て社会での自分の役割を見出し、仕事への目的意識が明確になりました。途上国の現場を知っているからこそ、未来をよくしたいという強い意思のもと仕事に取り組んでいます」と語る。長い海外経験を生かし、途上国に進出する中小企業の力となり、現地での開発課題の解決につながる仕事を生み出すに違いない。

また、内田さんは帰国後の就職活動に苦労したものの、昨今は途上国でビジネス展開する中小企業が増加傾向にあり、協力隊経験者の活躍の場も増えるだろうと、次の世代にエールを送った。

内田さんへのエール

(株)イースクエア
取締役
田村 賢一さん

企業の海外展開や途上国での事業開発に携わる中で、クライアントと国籍を超えてコミュニケーションできる能力と順応性の高さが内田さんの強みです。弊社は、中小企業海外展開支援を行うJICAとの関わりも深く、JICAのスキームに精通している点に加え、協力隊経験で培ったネットワークにも期待しています。

Federative Republic of Brazil
赴任先 ブラジル

《ドウラードス日本語モデル校》
・任地：南マットグロッソ州 ドウラードス市
・同州日伯文化連合会が設立した学校に配属
・料理教室、俳句会、農業研修会など日本文化も伝えた

えもと　あつこ
江本 敦子さん

日系社会青年ボランティア
横浜市立上永谷中学校 教諭

神奈川県出身。国際ワークキャンプ形式のボランティアでタイの山岳民族の暮らしに触れ、農業に興味を持ち北海道の牧場へ。その後、女子プロレスラーの道に進み、引退後、2012年より日系社会青年ボランティア・日系日本語学校の教師としてブラジルに派遣。2015年より横浜市立上永谷中学校で英語を教え、サッカー部副顧問も務める。

準備を重ね、悔いなく行動。背中を見せられる教師に

《派遣中》
①日系人の子どもたちに和太鼓を通して日本文化を伝える
②現地の生徒たちとの最後の集合写真
《帰国後》
③放課後に行う生徒の課題チェック

教員をめざし、経験を積む旅へ

両親が中学校の教師だったこともあり、高校生の頃から同じ道をめざしていた江本さん。教育実習で教壇に立った時、19歳の自分に圧倒的な経験不足を実感。そこから“経験を積む旅”が始まる。

短大卒業後、海外への興味が強かった江本さんは、1年間国内外で国際ワークキャンプのボランティア活動に参加した。世界中の若者と経験をシェアし、その中でJICAボランティア経験者に出会い、いつか自分もJICAで長期ボランティアに参加すると心に決めた。そして、次の転機は、国際ワークキャンプで訪れたタイの山岳民族の村での体験。家畜をさばき、洗濯板で服を洗い、自然の中でたくましく生活する中でひらめく。「農業をやりたい!」と。タイから帰国後すぐに北海道に飛び、牧場で2年間乳搾りのバイト生活へ。それだけでは終わらず、「500kgの牛を扱い体格が良くなったり、体力に自信がついてプロレスラーになりました。格闘技経験はゼロ、ただ「おもしろそう!」という理由で応募し、気付けばリングの上で8年間……。辛いけど楽しかったですね。でも、プロレスラーは教師になるためのステップなので、30歳を過ぎて引退を決めました」。

ボランティアに必要なのは、共につくり上げる精神

リングを去った江本さんの次の関心は、憧れていたJICAボランティア。日本語教師の資格を取って応募し、派遣先はブラジル中西部の街にある日系日本語学校に決まる。ブラジルを選んだ理由は、「プロレス時代にブラジリアン柔術もやっていて、聖地に行ってみたかった」と江本さんらしい。

日系日本語学校は、日本語教育の他に、折り紙、演劇、和太鼓や日本舞踊などの文化活動にも意欲的で、日系社会コミュニティの拠点になっていた。古きよき日本の文化が脈々と受け継がれ、日系人たちは日本舞踊も着付けも秀逸。江本さんは、何もできない自分にもどかしさを覚えたという。「早い時期に気持ちを切り替え、一緒に学ばせてもらう感覚で接していました。ボランティア活動は、誰かを助けるためではなく、人生勉強の場だと私は思っています。『してあげる』ではなく『させてもらう』。何かを変えるより、現地の人に学び、共につくり上げるという気持ちが大切。成果を形や数字で残すより、人と交流し絆を築くことに意味があると思います」。

多彩な人生経験が子どもたちの道しるべに

JICAボランティアで得た宝物の一つが仲間だ。「年齢も職業も違う、才能とエネルギーに溢れる30名程の同期メンバーとは、派遣中も現在も連絡を取り支え合っています。また、日系社会に残る助け合いの精神や日本文化を大切にする心、言葉が人を育て、人をつくるという教えなど、日本人として大切なことを学び、教員としての基礎を築くことができました」。

豊富な経験を糧に江本さんは教師の夢を叶え、2015年から横浜市立上永谷中学校で英語を教えている。「私にできるのは、生徒に自分の生きてきた道を見せること。こんな人生もあると知ってもらい、人生の選択肢を増やす一助になれたらうれしいです」。

江本さんへのエール

横浜市立
上永谷中学校 校長
北見 俊則さん

江本先生は、教員希望だったにも関わらず、まずは人生経験をしてからということで、JICAでブラジルに派遣されたり、北海道の牧場で働いたり、女子プロレスで活躍したり、様々な経験をしてきました。これは、中学生を指導するのにとっても役立つ、何物にも代えがたい経験です。この経験を生かして、グレート・スーパー・ティーチャーを目指してほしいです。

Mongolia
赴任先 モンゴル

《ウランバートル市 青少年開発センター》
・任地：首都ウランバートル
・同国の人口のおよそ半数近くが集まる大都市
・家庭内暴力などを受けた子どもたちやストリートチルドレンを支援

人と地域を変えた経験を地元活性化につなげて

萩生田（はぎうだ） 康治（やすはる）さん

(株)つるや呉服店 代表取締役

神奈川県出身。大学卒業後、呉服店勤務の傍ら長野冬季五輪エスコートスタッフ、日韓青少年自転車ツアー日本団長など青少年関連の活動を続け、2002年より青少年活動隊員としてモンゴルで活動。帰国後、呉服店を経営しながら相模原お店大賞実行委員長や市商業産業ビジョン作成など、行政や大学と連携し地域活性化に貢献。青年海外協力隊の経験を生かし相模原市の児童館長も務める。

《派遣中》
①萩生田さんに駆け寄る子どもたち
②子どもたちに人気の飛行機の工作
《帰国後》
③地域振興の話で盛り上がる

呉服店を軸に地域貢献、国際交流と幅広く

萩生田さんは、モンゴル国初代青少年活動隊員として、ウランバートル市ハンウール区役所に赴任した。現在は、淵野辺駅前で老舗呉服店を営み、名刺に書かれた『英語・モンゴル語が通じる呉服屋』の文字が今なおグローバルな活動を物語る。仕事は呉服・和装小物販売に留まらず、商工会議所役員なども務め地域活性化の中核を担う存在。さらに、着付け講座や日本文化の体験ツアーを企画し、桜美林大学の留学生や外国の旅行者を歓迎。英語版HPには各国から予約が入り、ツアーは着物でのお茶席体験、神社参拝、居酒屋で日本特有のお通し文化などに触れるコースが人気だ。

「地域の発展は、そこに暮らす子どもや店の繁栄と直結するとモンゴルで実感。以来、地域活動に積極的に関わっています」。

マンホールチルドレンの生活改善をめざして

若い頃から国際協力に興味があった萩生田さん。「欧州を旅した大学時代、足を延ばしたモロッコで見た旅行者にお金を無心する子どもの姿に衝撃を受けました。その後、何か自分にもできる事が無いかと参加した長野冬季五輪の案内ボランティアで協力隊経験者の体験談を聞く機会に恵まれ、『これだ!』と心打たれました」。

モンゴルでは派遣先の区役所の社会開発課に所属し、日本の民生委員の立場で児童向け行動計画の作成を担当。しかし、配属課が閉鎖される事態に見舞われ、動転しながらも現地のJICA事務所と共に新たな配属先を探すことに。モンゴルでまさかの就職活動の末、マンホールチルドレンの保護施設で、子どもを社会や家庭に戻す行動計画を立てる仕事に就く。「子どもたちの多くは、保護者が近くに住んでいても暴力や育児放棄で施設に保護されている状態にあり、大人に強い不信感を抱いていました」。子どもたちと料理をつくり共に味わい、同じ目線で生活することで少しずつ信頼関係を築き上げていく。子どもたちからの呼び名が「ヤスバクシャー(ヤス先生)」から「ヤスアハー(ヤスお兄ちゃん)」、「アーバー(パパ)」に変わったことが一番うれしかったそう。

子どもの生活改善にあたり、萩生田さんは3つのステップが必要と考えた。「第一に必要なのは教育です。近隣の学校に子どもの受け入れを打診しても教室が足りず断念、結局保護施設で勉強を教えることに。次は、清潔で健康な生活の実現。同期の隊員の手を借りて散髪会や健康診断を行いました。最終目標は、子どもたちを家庭にかえすこと。保護者を訪ねて粘り強く子どもの受け入れ環境を整えていきました」。

価値観が変わる経験を若い世代に伝えたい

帰国後は、モンゴルでの体験を社会に還元しようと、国際協力出前講座の講師や協力隊の応募相談員としても活動する。「モンゴルは日本より物質的に不自由かもしれません。しかし、人々の心は豊かで精神的な幸福度は高いと感じました。日本と同水準のサービスを受けられないことをかわいそうと思う日本基準の考え方を、協力隊の経験が変えてくれた」など、若い世代に向けた発言が、真のグローバリズムを考えるきっかけを与えている。

萩生田さんへのエール

桜美林大学 渉外事業部
地域・社会連携室 課長
福原 信広さん

大学が地域との連携を進める中、地域イベントなどに参加する学生を公私に渡りサポートしてもらっています。また、留学生対象の着付け講座は、国際交流の必要性を実感する萩生田さんならではの試み。語学・思考共にグローバルで誰とでもつながれる柔軟性が、学生と地域の絆を深めてくれています。

Republic of Maldives
赴任先 モルディブ

《ゲマナフシ・スクール》
・任地：ゲマナフシ島
・首都から400km離れたガーフアリフ環礁の中にある島の1つ
・小中高統合校（生徒約150名在籍）の主に体育の授業に従事

途上国への偏見をなくし 海外を身近に感じてほしい

佐藤（さとう） 直子（なおこ）さん

現職教員特別参加

藤沢市立秋葉台小学校 教諭

神奈川県出身。大学卒業後、藤沢市立湘南台小学校に入職。2011年よりモルディブ・ゲマナフシ島に小学校教諭として派遣される。帰国後は藤沢市立秋葉台小学校に異動になり、モルディブでの体験談を通して途上国の姿を伝える授業に定評がある。また、JICA横浜で開催された国際教育研修会で講師を務めるなど、国際理解・開発教育を深める活動にも取り組んでいる。

《派遣中》
①先生向けに行ったワークショップ
②マット代わりにカーペットを使う体操
《帰国後》
③派遣時の写真を用いた総合学習

首都から400km超、体育の授業がない島へ

佐藤さんが小学校教諭として派遣されたのは、モルディブのゲマナフシ島。首都マレから飛行機で1時間、さらにチャーター船を乗り継いで行くローカルな島だった。「モルディブでは教育体制は整っていましたが、体育の授業がありません。島に着いて小学校を訪ねたその日に、『体育を教えてほしい』と言われました」。もちろん体操着はなく、すぐに体育の授業を時間割に組み込むことも難しく、まずは授業が始まる早朝6時に、運動場で自由参加の体育クラスをスタートした。体操着が支給され、授業として体育を行えたのは、赴任から1年後のことだった。

授業を一からクリエイトする貴重な経験

授業では、基本運動である「走る・投げる・飛ぶ」を、段階的に練習するプログラムを佐藤さんが考案。走り高跳びのバーはゴムを使い、足りない道具はある物で代用した。「生徒たちは、外遊びでよく体を動かしていましたが、正しい体の使い方がわかりません。ボールの投げ方を教えることで遠くに投げられ、早く走れるコツを覚えてリレーができるようになり、楽しそうに取り組んでいました」。

しかし、先生たちの反応は芳しくなかったようだ。イスラム教国のモルディブでは、女性は先生でも肌を隠し頭にはスカーフのような布を巻く装いが一般的。体育を教えるには適さず、先生たちも体育教育を受けていないため授業に積極的ではなかったという。佐藤さんは、「無理のない指導法を考え、また先生に体育の楽しさを理解してもらわないと授業として定着しない」と思い、先生向けのワークショップを行う。バレーやサッカーの試合をして、体育の楽しさを実感してもらうことで指導欲を掻き立てた。「日本で教員経験があっても、教科書や時間割がない真っ白な状態から授業をつくり上げるのは初体験。周りを巻き込みながら、一からクリエイトするのは楽しいですね。私自身の自主性も高まりましたが、そういう姿勢は帰国後、日本の生徒にも伝えています」。

国や生活が違っても、同じ地球に暮らす友達

佐藤さんが海外の教育現場に触れたのは、モルディブが初めてではない。大学時代、アメリカにインターンシップ留学し、学校で日本語を教えるボランティアをしながら語学研修を受けた。海外で教える経験は、夢だった教員のスキルアップにつながると感じ、大学4年の授業で知った協力隊の現職教員特別参加制度に興味を持つ。初任校で5年間教壇に立ちモルディブへ。そして今、藤沢市秋葉台小学校で6年生を受け持つ。

総合学習の授業などで、生徒にモルディブの話をする機会は多い。たとえば、水を飲む少年の写真を見て、生徒が少年の生活をイメージしていく。実はその水が雨水であると伝えることで、日本では想像できない生活の違いや途上国の真の姿を学ぶことに。「途上国の人はかわいそうと思ってほしくありません。現実は知るべきだけど、大変さの中にも楽しいことがあるのは私たちも同じ。人は平等で国が違っても友達だということを伝えたいです。そして、協力隊の話を通して海外を身近に感じてほしい」と語った。

佐藤さんへのエール

藤沢市立
秋葉台小学校 校長
瀧澤 由美子さん

昨年はモルディブ共和国大使に来校していただきました。講演を聞いた6年生が街で募金活動を行い、世界に目を向け自分ができることを探すきっかけが生まれました。また、佐藤さんの協力隊参加に影響を受け、タンザニアでの教師海外研修に参加した教員もいて、教師間でも国際貢献のバトンがつながっています。

Federative Republic of Brazil
赴任先 ブラジル

《インダイアツーバ
日伯文化体育協会野球部》
・任地：インダイアツーバ市
・サンパウロ市から北西へ102kmに位置し人口は約15万人
・スポーツ振興として野球指導に携わる

黒木（くろき） 豪（ごう）さん

日系社会青年ボランティア
日本体育大学 国際交流センター

宮崎県出身。私立横浜高等学校硬式野球部で甲子園に出場し、チームを全国準優勝に導く。日本体育大学体育学部卒業後、公立中学校の保健体育講師に。2009年より日系社会青年ボランティア・野球隊員としてブラジルに渡る。帰国後は母校の大学に就職し、学生支援センターを経て、現在は国際交流センターでJICAボランティアや留学を希望する学生をサポートしている。

人生は計画通りじゃないから挑戦した分、おもしろい

《派遣中》
①日系人の子どもたちに伝えた日本式野球
②選手たちと全力で勝ち取った全国3位
《帰国後》
③自らの経験を学生たちにアドバイス

視野を広げ、教員として成長する機会を求めて

甲子園で快音を鳴らした高校球児は、大学を卒業して中学校の保健体育講師になる。そして、JICAボランティア、WBCブラジル代表コーチを経て母校の日本体育大学に就職。まるで何かに手招きされるように、道が開けて行った黒木さんの人生。「ラッキーが続いた」と言うが、何事にも全力で向き合った結果に他ならない。

「大学まで野球一筋の自分が教壇に立ち、視野の狭さを痛感。生徒一人ひとりによりそえる教員になりたいと思った時、大学の恩師からJICAボランティアを勧められました」。海外志向はなく一度は断ったものの、思い切ったステップを踏まないと自分を変えられないと考え、ブラジル行きを決めた。

精神・技術の両面から日本式で徹底指導

野球隊員として渡ったブラジルでは、13～14歳の野球チームの指導にあたったが、若くて言葉もままならない日本人が信頼を得るには、結果を出すしかなかった。「指導方針は、ブラジル式ではなく、日本式を選びました。決め手となったのは、『せっかく日本から来たのだから、礼儀も含めた日本式の野球を教えてほしい』という、ブラジル野球に関わる日系人の一言です。歓迎ムードではない中、私を信頼してくれた数少ない存在であり心強かったことを覚えています」。

当時のチームはゴミをグラウンドに捨てる、用具の扱いは乱暴、あいさつはしないなど、野球をする以前の問題が山積み。黒木さんは、精神面の指導を徹底し、技術面では基礎練習を重視。「下手でも力を抜くな、全力でやれば次の課題が見えてくる」と言い続けた。その甲斐あって、予選敗退続きのチームが全国野球選手権大会で3位に輝く大躍進を果たす。日本語で「コーチ、ありがとう!」と言われ、子どもたちが駆け寄ってきた時は号泣し、人はここまで変われるものかと感動したという。そして、黒木さんにも変化があった。「今までの私は、意見を主張することで人を動かしてきました。常に『これは私の意見だけど、あなたはどう思う?』と聞く日系人を見習い、決定権を相手にゆだねたら人間関係が楽になり、ブラジルでは人との向き合い方においても学びが多かったです」。

自分で決めて踏み出す一歩に意味がある

黒木さんの功績はブラジル野球連盟会長に評価され、ボランティア終了後WBCブラジル代表コーチに就任し、活躍の様子は日本の新聞でも紹介された。その後は、縁あって日本体育大学に就職が決まるという快進撃が続く。現在は、同大学の国際交流センターで、JICAボランティアなど海外をめざす学生に論文添削や面接指導のサポートを行う。「2009年にブラジル行きを決めた時、3年後にWBCのコーチを任されるなど予想もしません。人生は計画通りじゃないからおもしろい。相談に来る学生には、自分で決めて一歩を踏み出す大切さを伝えています」。

また、野球部のコーチとしても汗を流す。日系人は信念が強く、コーチの指示でも納得しないと行動しない。そうした芯の強さを日本の選手に受け継ぎ、海外に出ても自分の意見を言える主体性のある人材を育てたいと願っている。

日本体育大学
国際交流センター事務長
立野 宏幸さん

黒木さんへのエール

当校は、JICAと連携し途上国の体育・スポーツの普及、振興のため学生のJICAボランティアを多く輩出しています。学生に直接体験談を伝えられる黒木さんは、国際交流センターの適任者であり、ボランティア参加者の増加は彼の貢献が大きいといえます。今後、野球部の指導者としても大いに期待しています。

Republic of Uganda
赴任先 ウガンダ

《国家森林局カリンズ森林保護区》
・任地：カリンズ森林保護区
・保護区は首都カンパラから西へ380km。広さは147㎢
・動物・人・森の共生を図る環境教育活動に従事

かわぐち　よしや
川口 芳矢さん

現職参加

(公財)横浜市緑の協会 よこはま動物園

愛知県出身。1999年に大学院動物応用科学専攻博士前期課程を修了し、(公財)横浜市緑の協会に入社。開園時からよこはま動物園ズーラシアに飼育員として配属。2007年に青年海外協力隊員としてウガンダのカリンズ森林保護区に赴任、エコツーリズムの定着と住民への環境教育に携わる。2009年に帰国、復職しチンパンジー飼育チームに配属。現在はアジアのサルなどを担当。

野生動物と人の共生を考え、学べる動物園に

《派遣中》
①森林内でのチンパンジーの観察
②民芸品づくりに取り組む女性たち
《帰国後》
③子ども向けプログラムの講義風景

野生動物の生息地の実情を見て、感じたい

「時間が経った今も、協力隊はみずみずしい体験」と語るのは、よこはま動物園(ズーラシア)で働く川口さん。協力隊を知ったのは、参加したシンポジウムで、マレーシアのオランウータン保護施設で環境教育に携わった協力隊経験者の話を聞いたのがきっかけ。これまで海外で野生動物の生息地に赴いたことはあったが、あくまでも観光でのこと。「2年間じっくり活動できる協力隊は、短期間の滞在では見えてこない野生動物と住民の共生の実情について、より深く知る有効な選択肢だと感じました」。

動物園側も野生動物の生息地とつながりを深めたいと思っていたが、いざ職員の派遣となると実現は難しかった。しかし、川口さんのウガンダ行きは、動物園側にも大きな収穫をもたらすことになる。また、人件費補てん制度などサポート体制や、現地での手厚い安全対策も現職参加を後押ししたという。

動物・人・森を守るエコツーリズムを実施

川口さんの派遣先は、ウガンダのカリンズ森林保護区。2007年に環境教育の活動を行うべく現地に入り、野生動物と人の共生を図るため、チンパンジー観察を中心とする「エコツーリズム」の導入と推進に従事する。「エコツアーの実施には、まずチンパンジーの生息地に人が入ることをチンパンジーに認めてもらう必要があります。私の最初の仕事は、毎日現地スタッフとともに森に入ってチンパンジーの群れと共に歩き、敵意がないと伝えることでした」。

他に、ツアー客向けのガイド技術の向上やツアーの企画や運営についての助言なども川口さんの役割。これらは動物園での業務経験がウガンダで役立つことになる。

ツアーの収益が現地住民に還元されてこそのエコツアー。その方法として森に隣接する村を訪れるコミュニティーツアーを企画した。「ホストファミリーの家にツアー客が訪れ、村人と一緒にローカルフードをつくり試食する。住民と触れ合う中で、森は野生動物だけでなく、周辺住民にとっても生活に必要な薪や現金収入を得る命の源であることをツアー客に知ってほしいと思いました」。

学びの場としての動物園の役割を発信

2009年に帰国した川口さんは動物園に復職し、同年に公開されたチンパンジーエリアの担当になる。赴任中、公開準備に関わるデザイナーや建設業者がウガンダを訪問し、カリンズ森林保護区をリサーチ。川口さんはチンパンジーの生息地の現状などを伝え、チンパンジーエリアの森はカリンズ森林保護区も参考にされている。

現在は、飼育業務と平行して大学などでの講義や来園者向けの教育プログラムにも関わる川口さん。協力隊を経てこの動物園で「伝えるべきこと」が見えてきたという。「野生動物と人が地球上で共生するには、動物と同時に、周囲の住民の生活も含めて考える必要があると切に感じました。現地を見たことのない人に、この実感をどう伝えていくかが今後の課題です。そして、動物園が遊びの場だけでなく、社会的な気付きを得る学びの場であることも広く発信していきたいです」。

川口さんへのエール

よこはま動物園
飼育展示第一係長
齋藤 憲弥さん

野生動物と人がどのように共生しているかを、実体験として伝えられる人材がいることは園にもお客様にも大きなメリットだと思います。現在、力を入れている教育プログラムはもちろん、今後は横浜市内の動物園の飼育員にも体験を伝え、市内の動物園全体の底上げにも貢献してほしいです。

Republic of Ghana
赴任先 ガーナ

《聖アンドリュース中学校》
・任地：イースタン州アキムスウェドル
・1948年創立の中学校（派遣時の生徒数180名、教師数10名）に配属
・地域の学校を巡回して、音楽の指導と実技による情操教育を実施

森田 麻由（もりた あゆ）さん

ヨーロッパ・ソーラー・イノベーション(株)
営業部 第二グループ

神奈川県出身。大学卒業後、会社員を経て2009年より協力隊員としてアフリカ・ガーナで青少年活動を行う。帰国後は、在京ガーナ大使館で大使秘書、JICE(日本国際協力センター)でアフリカ関連のプロジェクト「ABEイニシアティブ」に関わり、31歳でヨーロッパの太陽光発電関連機器を中心に扱う商社に入社。現在は、営業職として国内外で活躍。また、協力隊の仲間等とパフォーマンスグループ「Aha3de」を結成し、イベントなどでガーナのダンスや音楽を披露しアフリカ文化を伝えている。

協力隊があって今がある。アフリカは私の母なる大地

《派遣中》
①感性を育むことを音楽で伝える
②音楽を通して一体となった生徒たち
《帰国後》
③ガーナ文化伝承グループ「Aha3de(アハエデ)」

中学の頃からアフリカでの国際貢献を夢見て

森田さんは、落ち着いたたたずまいの中に、「前例がなければ、つくっていく」という開拓心を感じる女性。中学時代から「アフリカの子どもたちのために何かしたい」と思い、大学は国際協力を学ぶ国際学科へ。かつてジャーナリストだったボランティアゼミの先生が話してくれたアフリカの話に、胸が高鳴った。「ゼミで訪れたタイが初めての開発途上国です。現地の学生と幼稚園の建設を手伝う中、国籍は違っても音楽やスポーツで交流できるとわかったことが発見でした」。

進路に迷う森田さんに、先生は日本で社会経験を積み、その後協力隊に参加する選択肢をアドバイス。そして、2年8ヵ月社会人として働いた後、選考試験に合格しアフリカ・ガーナへの派遣が決定する。「専門技術がほしくて日本語教師の資格を1年かけて取得しました。資格は取得過程での体験も糧になるという協力隊OBの言葉通り、教会で外国人に日本語を教えたボランティア活動もいい経験です」。

宗教の壁を越えた勇気ある一歩

現地での仕事は、村にある小中学校を巡回し、音楽や図工の授業と放課後のクラブ活動を行うこと。試験科目が重視されるガーナで、情操教育の必要性を理解してもらうのに苦労した。試行錯誤の中、現地の人の心を大きく動かす出来事がめった。村にはキリスト教とイスラム教の学校があり、両校を隔てていたのは高く厚い宗教の壁。「日本人会主催のお祭りで、両校の生徒が一緒に沖縄エイサーを踊ることを提案しました。最初は、キリスト教徒の子どもがイスラム教徒の子どもたちに石を投げるし一体感なんてゼロ。『無宗教の麻由に、宗教の壁は理解できない』と言われて後悔もしました。でも、イスラム教徒の子どもたちは純真で、一生懸命に踊りを練習する姿がキリスト教徒の子どもたちの心を打ち、最終的には一つのチームになったんです。校長先生は『60年以上生きてきて、こんな光景は初めて見た』と泣いて喜び、時間はかかるけど互いを理解する気持ちが人をつなぐと感じました」。

子どもから教えられることは多かった。「一つわかったことは、彼らがガーナで生きる上で、日本式の基準は重要ではないということ。一番大切なのは、今を精一杯生きることなんです。医療環境が不十分なガーナでは、死が身近であるからこそ、生きることに全力でした。日本人である誇りは忘れず、現地では私がガーナ人によりそうべきだと気付きました」。

いつかアフリカのビジネスパートナーに

帰国後もアフリカとの縁は深く、在京ガーナ大使館を経て、JICE(日本国際協力センター)ではアフリカ関連のプロジェクト「ABEイニシアティブ」で南アフリカとモザンビークを担当。現在は、太陽光製品を扱う商社に勤務し、「いつかアフリカに太陽光パネルを設置し、今度はアフリカのビジネスパートナーになりたい」と目を輝かせる。また、ガーナで活動した協力隊の仲間等とパフォーマンスグループ「Aha3de(アハエデ)」を結成し、ダンスや音楽と共にガーナの文化を伝える活動を行う。森田さんが進む道の先にはいつも母なる大地アフリカが広がっている。

森田さんへのエール

ヨーロッパ・ソーラー・イノベーション(株)
代表取締役
土肥 宏吉さん

営業事務で応募してきた森田さんですが、協力隊やその後の経歴からコミュニケーションの達人と見込んで営業職に抜擢。顧客である中小企業のトップとのやりとりにも長け、また海外出張では現地でのコーディネート力が優秀です。今後、東南アジアや中東、アフリカなどにも同行してほしいと考えています。

Republic of Costa Rica
赴任先 コスタリカ

《ベレン市役所 女性課》
・任地：エレディア県ベレン市
・首都サンホセからバスで30分程に位置する静かな街
・主にDV被害者の女性やシングルマザーの支援

安養寺（あんようじ） 智（とも）さん

横浜市緑区役所
地域振興課 地域力推進担当係長

高知県出身。大学院で開発・ジェンダー論コースを専攻。修了後、2003年に中米コスタリカに村落開発普及員として赴任し、市役所に配属され女性の起業支援を行う。2007年には短期ボランティアとしてペルーに赴任。2008年よりJICA横浜で開発教育や広報を担当。2010年、協力隊などの経験を評価する国際貢献枠で横浜市職員になり、政策局を経て緑区役所に勤務。

それぞれの一歩を大切に 日本でも人によりそう支援を

《派遣中》
①女性を中心とした起業家への講習
②信頼されるきっかけとなったワークショップ

《帰国後》
③住みやすい地域づくりをサポート

最初から上手くいかないからこそ、頑張れた

「大学院で学んだ開発や国際協力、ジェンダーの視点を生かして仕事がしたいと思い、在学中に協力隊に応募し、大学院修了後すぐに参加しました」。

コスタリカで社会人としての第一歩を踏み出した安養寺さん。村落開発普及員として市役所の社会開発部・女性課に配属が決まり、男尊女卑の風潮が強い中、DV被害者の支援や市役所職員の意識改革に取り組むカウンターパートの仕事をサポートすることに。しかし、実際は言葉に苦労し、即戦力を求めるカウンターパートの信頼を得られず、その上慣れない環境に体調を崩すなど、自分に苛立つことも多かった。それでも「ここで逃げたら何も残らない」。そんな思いが背中を押した。

行動すれば自分が変わり、周りも変わる

悶々とする日々の中、「女性への暴力撤廃の重要性を訴えるワークショップを企画。日本で平和の象徴である折り鶴をみんなで折り、暴力がある限り女性は平和に暮らせないという意識を共有しました」。女性課の仕事に関心が低かった市役所の職員をはじめ、子どもから高齢者まで多くの市民を巻き込みワークショップは大成功。行動は可能性を広げ、自分を信じて踏み出すと、かならず手をさしのべてくれる人がいることを実感した。

このワークショップの成功を受け、日頃から相談を受けていたDV被害者の女性たちやシングルマザーの起業支援を事業化することに。ワークショップを通じて信頼関係ができた市役所の仲間も手伝ってくれた。起業のための講習会では、経営のノウハウに加え、暴力などで失われた女性の自尊心を取り戻すケアにも力を入れる。「彼女たちは自信をなくし、自分がつくった商品など価値がないとバザーでもタダ同然で売っていました。まず、自分を大切にする心の育成が必要と感じたのです」。任期が終わる頃、女性たちの内面に目覚ましい変化が現れる。市議会で女性支援の予算が議論された時、自ら市議会でプレゼンしたいと申し出た。安養寺さんの背中に隠れて内気だった女性たちが、自分の足で歩き始める姿を見届けることになる。「人によりそい、共に小さな変化を起こすことで、それがさざ波のように広がって社会を変革する力につながる、とてもやりがいのある仕事でした」。

コスタリカを後にした安養寺さんは、短期ボランティアとしてペルーに渡り女性支援に取り組む。「ペルーでは、日本やコスタリカとはまた異なる価値観に触れたことで、物事を多角的に捉える目が養われました」。

今は、地域の人と共に汗をかき課題を解決

帰国後は、JICA横浜の神奈川県国際協力推進員を経て、横浜市役所に入職。現在は、緑区役所の地域振興課で多様化する地域の課題を住民自らが解決できる地域力を育む取り組みの中心を担う。地域貢献を考える人の思いを実現する『みどり「ひと・まち」スクール』も好評だ。「この仕事で大切なのは、地域の人と共に汗をかき、思いを共有し、信頼関係を築くこと。人によりそう支援には、コスタリカやペルーでの経験が役立っています。地域の方の思いをサポートし、職員の意識向上にも努めていきたいです」。

横浜市緑区役所
総務部地域振興課長
下村 晶さん

安養寺さんへのエール

派遣先では、現地の方の目線に立って話を聞き、信頼を築くことが不可欠だったと思います。その姿勢は地域振興の仕事にも通じ、安養寺さんはコミュニケーションが円滑で自治会や各団体の方々からも厚い信頼を得ています。今後、ますます区役所と区民をつなぐ、よきパイプ役になることを期待しています。

JICA横浜

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1
TEL:045-663-3251（代表） FAX:045-663-3265
URL. http://www.jica.go.jp/yokohama

独立行政法人 国際協力機構　横浜国際センター